

始皇帝と五大夫の松

高 芝 麻 子

はじめに

「五大夫」とは松の異称である。「大夫松」などともいい、秦の始皇帝が松に五大夫の爵位を与えたとの故事に由来する。秦代の爵位は二十等級あり、五大夫は下から九番目にあたる。¹⁾ 本論は、その五大夫に封ぜられた松について、日中の古典文学でどのように言及されているかを比較し、その描かれ方の差異の背景を探るものがある。

一 封禪の儀

まず五大夫の由来となった故事から確認したい。故事の初出は、管見の限り『史記』のようである。巻六「始皇本紀」二十八年に、始皇帝が泰山で封禪の儀式を行ったとの記事が見える。その記事に

よれば、下山に際し、始皇帝一行は急な風雨に遭っている。

下、風雨暴至、休於樹下、因封其樹為五大夫。

(下らんとして、風雨暴にかに至り、樹下に休み、因りて其の樹を封じて五大夫と為す。／下山に際し、急に激しい風雨に遭い、木陰で休んだ。そのためその木に爵位を与え五大夫とした。)

急な風雨で途方に暮れた始皇帝一行は、木陰で雨宿りをし、その木陰を提供した樹に爵位を与えたとの記事である。五大夫という爵位は出てくるが、この記事だけでは、樹が松であったということは分からない。

『史記』巻二十八「封禪書」には、同じ雨宿りについて、以下のように記している。

始皇之上泰山、中阪遇暴風雨、休於大樹下。諸儒生既絀、不得与用於封事之礼、聞始皇遇風雨、則譏之。

(始皇泰山に上り、中阪に暴風雨に遇ひ、大樹の下に休む。諸儒生は既に紉せられ、与して封事の礼に用ゐらるるを得ざれば、始皇の風雨に遇ふを聞きて、則ち之を譏る。／始皇帝は泰山に登ると、道半ばで暴風雨に遭ひ、大樹の下に休息を取った。儒学者たちはすでに退けられて、封禪の儀式に関わることができなかつたので、始皇帝が風雨に遭つたと聞いて、批判した。)

この記事は「始皇本紀」の記事と同じできごとを記録したものと見ていいだろう。しかし大樹が松であることへの言及がないばかりか、始皇帝が大樹に五大夫の爵位を与えたことにも言及されていない。さらに、「始皇本紀」には見えなかつた内容として、始皇帝が風雨に遭つたと聞いて、儒者たちが自分たちの説を受け入れなかつたからだと批判している点も重要である。この記事の少し前に、封禪の方法について、下問を受けた儒者たちの説明が様々に異なっていたため、始皇帝は儒者たちを退けたとの記載があることから、批判をしたのはその儒者たちであろう。

なお、『史記』「封禪書」とほぼ同じ文章が、『漢書』卷二十五「郊祀志第五上」にも見える。こちらにも、大樹が松であることや、五大夫に封じたことなどの言及はない。

『史記』「封禪書」の前掲部分の後にはさらに以下のような記事も見える。

始皇封禪之後十二歳、秦亡。諸儒生疾秦焚詩書、誅僂文学、百姓怨其法、天下畔之、皆曰、始皇上泰山、為暴風雨所擊、不得封禪。此豈所謂無其德而用事者邪。

(始皇封禪の後十二歳にして、秦亡ぶ。諸儒生は秦の詩書を焚

き、文学を誅僂するを疾み、百姓は其の法を怨み、天下之に畔く。皆曰く、始皇泰山に上るも、暴風雨の撃つ所と為り、封禪するを得ず、と。此れ豈に所謂其の徳無くして事を用ゐる者ならんや。／始皇帝の封禪の後十二年で、秦は滅んだ。儒者たちは秦が『詩経』『書経』を焼き、知識人を虐殺したことを憎み、人々は秦の厳格な法律を恨んでいたので、天下はあまねく秦にそむいた。みな「始皇帝は泰山に登つたけれど、暴風雨に遭つて封禪を行うことはできなかつた」と言った。これは、世に言うところの、徳に欠けるのに封禪を行おうとしたということであろうか。)

封禪のわずか十二年後に秦は滅んだこと、人々は深く秦を憎んでおり、批判するにあたり、暴風雨のために封禪が行えなかつたと語っていたことを指摘した上で、司馬遷はそれを否定せず、始皇帝には徳が足りなかつたのではないかと述べている。儒者や民衆のみならず司馬遷も始皇帝の封禪の成功に懐疑的であつたようである。

この樹が松であるとするのは、例えば『芸文類聚』卷八十八「松」に引かれる『漢官儀』などに見える。

漢官儀曰、秦始皇上封太山、逢疾風暴雨。頼得松樹、因復其道、封為大夫松也。

(漢官儀に曰く、秦始皇上りて太山に封じ、疾風暴雨に逢ふ。頼さいわひに松樹を得、其の道を復おほふに因りて、封じて大夫松と為すなり、と。／『漢官儀』には「秦の始皇帝が太山(泰山)に登つて封禪の儀を行い、暴風雨に遭つた。運良く松の木があり、その道を覆つて雨を遮つたため、爵位を与えられ

大夫松と呼ばれるようになった」とある。）

さらに『初学記』巻五「泰山」に引く『漢官儀』には泰山の小天門に秦時代の「五大夫松」があると見える。^③『漢官儀』の著者は後漢の応劭であることから、少なくとも後漢のころには、五大夫の爵位を与えられた樹が松であると見なされるようになっており、かつ実際にその樹だとされる松が実在したと考えていいだろう。

『梁書』巻四十一「許懋伝」に見える梁・許懋「封禅議」も始皇帝が雨宿りをした場所を松の木陰としている。

秦始皇登泰山、中坂風雨暴至、休松樹下、封為五大夫、而事不遂。

（秦始皇泰山に登り、中坂に風雨暴かに至り、松樹の下に休み、封して五大夫と為すも、事は遂げず。／始皇帝は太山に登る途中の坂で、急な風雨に遭い、松の木陰で休み、松に爵位を与え五大夫としたが、封禅の儀は遂行できなかった。）

始皇帝は封禅の儀式の内容について記録を残せていないため、詳細は明らかではなく、封禅が無事に執り行われたのかについても分らない。しかし、許懋は、『史記』「封禅書」で人々が「為暴風雨所撃、不得封禅」と述べていたのと同様に、始皇帝の封禅が暴風雨で失敗したと理解しているという点を確認しておきたい。

以上のように、『史記』「封禅書」には大樹の封爵に触れられておらず、暴風雨について儒者が批判したことと、暴風雨のために封禅できなかったと人々が語ったと記されていることから、暴風雨が故事の眼目であったと見なしていいだろう。『史記』「始皇本紀」には大樹の封爵の記事はあるものの、松とは言明されていない。松と明

示されるのは後漢の『漢官儀』や梁の許懋「封禅議」など、やや時代が降ってからのようである。

これらの記事にある松の故事をもとに、五大夫あるいは大夫が松の異称として用いられることとなる。次章では、詩に描かれる五大夫の松について、唐詩を中心に確認していく。

二 詩に描かれる五大夫の松

松は常緑樹であり、冬になっても変わらず葉を茂らせることから、変わらぬものを象徴し、しばしば優れた人物、君子の譬えとして用いられる。^④また、詩歌に描かれる伝統的な松のイメージについて、中尾健一郎氏は「君子の樹」という側面に加えて、「有用な人材の比喩」という側面があることを指摘している。氏によれば初唐時期には「不遇な人材を棟梁たるべき松に喩える詩が制作されており、その「背景には、国家が人材を木材に喩える修辞を用いて在野の賢人を求め、人材の登用を盛んに喧伝した初唐の気風があった」という。

中尾氏の指摘は六朝から初唐にかけての松を描く詩についてであるが、大筋において松は不変性や君子、有能な人材を象徴する樹であったと考えて大過ないだろう。それを踏まえ、始皇帝が松に爵位を与えた故事を読み込む詩を以下にいくつか見ていきたい。

盛唐・王維「過始皇墓」詩（『王右丞集箋注』巻九）

古墓成蒼嶺　　古墓　　蒼嶺を成し

幽宮象紫台　　幽宮　　紫台を象る

星辰七曜隔　　星辰　　七曜に隔てられ

河漢九泉開 河漢 九泉に開く

有海人寧渡 海有るも人寧ぞ渡らん

無春雁不迴 春無くんば雁迴らず

更聞松韻切 更に松韻の切なるを聞く

疑是大夫哀 疑ふらくは是れ大夫の哀しむかと

王維が始皇帝の墓に立ち寄って詠んだ作品である。最後は、松風のもの悲しい音を聞くと大夫が悲しんでいるのではないかと思われるのだ、と結ぶが、この大夫は始皇帝に五大夫に封じられた松からの連想であろう。榮華を極め不老不死を求めた始皇帝が、今では壮大な墓を空しく残すのみであることが、時を経て変わらぬ松と対比され、哀しみを生むのである。

中唐ごろの詩人李涉の「題五松駅」詩（『全唐詩』巻四百七十七）にも宿駅の名から大夫を連想する句が見える。後半二句を引く。

人生不得如松樹 人生 松樹の如きを得ざるも

却遇秦封作大夫 却て秦の封じて大夫と作すに遇ふ

五松駅とは長安の東にある宿駅であり、始皇帝が松を五大夫に封じた泰山からはかなりの距離がある。そのため、清・沈家本は『日南隨筆』巻五において泰山の五大夫松とは関係がない（与泰山五大夫松無涉）と指摘している。

だが李涉は五松駅という地名から、五大夫松の故事を想起している。故事を踏まえ、人は松のような長寿を得ることはできないのに、かえって松が人のように秦の大夫に封じられたと詠う。この詩は五大夫の故事に言及するものの、詩の主題は、王維詩と同じく、始皇帝が手を尽くしたにも関わらず不老不死を得られなかったこと

にある。なお、唐詩においては王維や李涉の詩のように、不老不死を求めて得られなかった代表的な人物として、しばしば始皇帝を描く。その点については稿を改めて論じることとしたい。

次に封爵そのものに評価を与える作品を見ていこう。長いので全文の引用は避けるが、初唐の劉希夷「孤松篇」（『全唐詩』巻八十二）には、松が始皇帝の封爵を受けることを恥じる（恥受秦帝封）との句が見える。これは「君子の樹」である松が暴虐な始皇帝の封爵を喜ぶはずがない、との理解に基づくものである。さらに興味深いのは、晩唐の李商隱「五松駅」（『李義山詩集』巻上）である。

独下長亭念過秦 独り長亭を下りて過秦を念ふ

五松不見見興薪 五松見えず 薪を興おふを見る

只応既斬斯高後 只だ応に既に斯高を斬りし後

尋被樵人用斧斤 尋たづぎて樵人に斧斤を用ゐらるべきのみ

この詩も李涉詩と同じく五松駅を描いているが、李商隱によれば地名の由来となったのであろう松はすでに失われている。始皇帝の側近の斯高、すなわち李斯と趙高とが、始皇帝亡き後、殺されてしまったように、松も伐採され、薪にされてしまったからである。

第一句に見える「過秦」は、前漢・賈誼「過秦論」（『文選』巻五十二）をいう。清の屈復はこの詩を「秦亡而後松見薪、人惡其暴虐如此、所以念賈生之過秦也」（『玉谿生詩意』）と評し、秦の滅亡後、封爵された松を薪とするほどに人々が秦を憎んでいたとし、そのため秦を過とがめる賈誼「過秦論」を思う（念過秦）と指摘する。秦の封爵を受けたがゆえに、「君子の樹」である松までもが憎しみを向けられたと詠うのは、劉希夷の詩同様に始皇帝が暴虐の君主であるこ

とを自明の前提とした表現である。

王維と李涉の詩は、封爵の故事を踏まえつつ、栄華を極め不老不死を求めながら得られなかった始皇帝と、長い時を生きる松という、人と松とを対比的に描く手法をとる。一方、劉希夷と李商隱の詩は、故事と関連させて始皇帝の暴虐を批判的に詠う。この四詩に共通するのは、始皇帝が松に爵位を与えたという故事が、本来の故事の主眼であった天譴（暴風雨）の要素を含まない形で詩に取り込まれている点である。さらにその故事が、詩における松や始皇帝の表象に新たな文学的意味を加えなかったという点も指摘しておきたい。封爵の故事を踏まえても踏まえなくても、始皇帝は不老不死を得られなかった皇帝、あるいは暴虐の皇帝として、松は長寿を保つ「君子の樹」として描かれているのである。その点を確認した上で、日本における受容の一端を見ていこう。

三 賢き始皇帝

鎌倉時代中期の『十訓抄』一ノ九には、以下のように書かれている。

人倫の事はうちまかせたる習ひにて、その例多ければ、注しあふべからず。

もろこしには、秦始皇、泰山に行幸し給ふに、俄雨降り、五松の下に立ち寄りて、雨を過ごし給へり。このゆゑに、かの松に位を授けて、五大夫といへり。五品を松爵といふ、これなり。しかのみならず、夏天に道行く人、木陰に涼みて、衣をかけ、あるいは馬に水飼ふもの、銭を井に沈めて通りけり。

賢き人は、心なき石木までも、思ひ知るむねをあらはずなり。⁽⁶⁾

冒頭の「人倫」とは『新編日本古典文学大系』の注によれば「人間同士の事柄」をいう。人間同士の事柄であれば書き切れないほどにあると断った上で、この段では人と木石の間の事柄の例として、始皇帝が五松に爵位を与えて「五大夫」としたことを挙げている。

この「五大夫」はいささか意味が取りにくい。『史記』においては「五大夫」が爵位の名であるから、松は一本であったと考えられる。しかし『十訓抄』の記載では雨宿りをしたのが「五松の下」であり、これは五本の松を言うのである。そうであればこの「五大夫」は五本の松の大夫の意味となる。しかし、後に「五品」を「松爵」と言うとき、これは「五大夫」を「五位の大夫」の意味と理解したためであろう。秦の二十等爵では「五大夫」は下から九番目、「大夫」は下から五番目にあたるが、日本では五位以上の者を「大夫」と呼ぶ。本来一本の松であったはずの五大夫の松が、五本の松だから五大夫であるとの誤読を生じ、さらに日本において大夫が五位以上であることを踏まえ、「五大夫」は「五位の大夫」の意味をも含み持つことになったものと考えたい。

なお、「五大夫」を五本の松であると見なす発想は、中国にも見える。中唐・陸贄「禁中春松」詩（『全唐詩』巻二百八十八）に「願符千載寿、不羨五株封」、晚唐・徐夤「大夫松」詩（『全唐詩』巻七百十二）に「五樹旌封許歲寒、挽柯攀葉也無端」とあるように、松が「五株」「五樹」と詠われることは少なくない。前章で引いた「五松駅」の「五松」も五本の松が想定されていた可能性がある。「五大夫」が五本の松であったとの誤読は、日本で生じたのではない。

く、中国から伝わったものであったのかもしれない。

ここで『十訓抄』に戻ろう。夏に木陰で涼んだ者は礼として木に衣をかけ、馬に水を飲ませた者は礼として井戸に銭を投げ込んでいくという例も挙げ、「賢き人」(優れた人)は石や木といった心を持たぬ者にも感謝を示すのだと述べている。つまり、心を持たぬ石や木をも深く思いやるような人の心情を高く評価していると言えるだろう。言い換えれば、ここでは松に爵位を与えたことが、始皇帝の優れた心を表す行為と見なされ、「賢き人」として評価する理由となっている。

別の例を引こう。能「高砂」には松を讃えて以下のようにいう。なかにもこの松は万木にすぐれて、十八公のよそほひ、千秋の緑をなして、古今の色を見ず、始皇の御爵に、あづかるほどの木なりとて、異国にも、本朝にも、万民これを賞翫す。

ここでは、松が「万木にすぐれて」いることを指摘し、外国でも日本でも賞玩される理由として、「始皇の御爵にあづかるほどの木」であることを褒めている。つまり、「高砂」において、始皇帝の故事は、松を讃えるために引かれていることになる。それは同時に、松を賞賛するために始皇帝の封爵の故事を引くのであるから、始皇帝という人物についても「高砂」は非常に肯定的に捉えているといっていいたいだろう。

同じく謡曲の「老松」には、やはり松を褒める文脈で、大夫という異称の所以が語られる。

さて松を、大夫といふ事は、秦の始皇の御狩の時、天俄にかき曇り、大雨しきりに降りしかば、帝雨を凌がんと、小松

の蔭に寄り給ふ、この松俄かに大木となり、枝を垂れ葉を並べ、木の間隙間をふさぎて、その雨を漏らさざりしかば、帝大夫といふ、爵を贈り給ひしより、松を大夫と申すなり。

ここで注目したいのは、始皇帝のために、松が自らの意志で雨を遮ったと描かれているところである。木石が意志を持って行動することの意味については稿を改めて論じるとして、ここでは松が始皇帝のために尽くそうとし、始皇帝がそれに報いて松に爵位を与えたと描いている点に注目したい。松は始皇帝を敬い、始皇帝はその松の献身を受け入れており、木石を心のないものとしている『十訓抄』より一歩進んで、松と始皇帝の間に互恵的かつ主従関係的な交流が成立している。風雨にも言及されているものの、ここでの風雨はあくまでも彼らの関係を成り立たせるためのきっかけに過ぎないのである。

この三例の松と始皇帝は、いずれも優れた存在として肯定的に描かれているといえるだろう。『十訓抄』の始皇帝は心を持たぬ松に報いるために爵位を与えたために評価され、「高砂」の松は始皇帝に爵位を与えられたために評価されている。「老松」に至っては、松が自ら進んで始皇帝を身を挺して守り、始皇帝がそれを嘉して松に報いるという美しい献身と報恩の故事に仕立て直されている。

同じ松と始皇帝の故事を踏まえていながら、日本ではこの故事を美談として捉え、始皇帝と松が相互補完的に評価を高めているように見える。対して、中国の文献においてはこの故事は美談として扱われていない。この違いはどこから生じるのであろうか。次章で始皇帝の描かれ方の違いからその理由を考えていきたい。

四 始皇帝の描かれ方

論者は「燕丹子」、『平家物語』および謡曲「咸陽宮」の始皇帝像について¹⁰⁾において、荊軻による秦王政(後の始皇帝、以下秦王政と始皇帝を区別せず、いずれも始皇帝と称す)の暗殺未遂の故事を中心に描く中国の「燕丹子」と、『平家物語』巻五「咸陽宮」、謡曲「咸陽宮」の間で、始皇帝の描かれ方が大きく異なっていることを指摘した。拙論の要旨をまとめると以下のようになる。

「燕丹子」など中国の故事に見える始皇帝は批判されるべき存在として描かれるのに対し、『平家物語』など日本の故事の中に見える始皇帝は肯定的に表現されることが多い。その理由として、日中の王権の捉え方が影響を与えている可能性が想定される。中国では、皇帝とは地上に対して絶対的な権限を持つ存在であると同時に、天子としてその政治を天に評価される存在でもあるため、政治に重大な瑕疵があれば、天が易姓革命をもたらし、地上の支配者は別の一族に交替することになる。つまり皇帝は常に政治の可否を問われる存在であり、王朝が滅びればそれは皇帝とその一族とが天からの譴責を受けた結果と見なされる。秦は始皇帝の死後、すぐに滅亡することから、始皇帝が瑕疵のある皇帝と見なされるのはやむを得ないことであり、「燕丹子」などにおいても、暗殺が批判されるどころか、暗殺を目論む燕の太子や荊軻に同情的に語られることになる。

ところが、日本においては、天皇は政治を天から評価される立場になく、政治の善し悪しを判断され、場合によっては別の一族が取って代わるということも想定されていない。つまり統治者は、中国

の皇帝のように監視され、批判を受け得る存在ではない。そのような社会的文脈の中で、始皇帝を天皇になぞらえる形で『平家物語』に荊軻の故事を取り込んだ結果、始皇帝が天皇と同じ立場に置き換えられることとなり、肯定されるべき立場へと転換されたのではないか。以上が本論と関わる前掲論文の要旨である。

なお、日本において始皇帝が天皇に重ねられ、肯定的に描かれるのは、『平家物語』とそこから派生した謡曲「咸陽宮」だけではない。

『十訓抄』一ノ三十八には勘解由次官明宗という笛の妙手がいだが、非常に緊張する質であったという。女官しか聞いていないと思いついていた笛の演奏を、帝が隠れて聞いていたと知った明宗が、動転して縁から落ちたとのエピソードがある。そこには続けて以下のように語られる。

昔、秦舞陽が始皇帝を瞻奉りて、色変じ、身ふるひたりけるは、逆心をつつみえざりけるゆゑなり。明宗、なによりて、さしもあはてけると、をか¹¹⁾し。

秦舞陽は荊軻とともに始皇帝暗殺に赴いた無頼の若者である。『史記』巻八十六「刺客列伝」の記載によれば、荊軻とともに使者として始皇帝の在所の前に進み出たとき、顔色を変じ、震えおのいて、群臣たちが訝しがるほどであったとあり、¹²⁾「燕丹子」にも類似の表現が見える。『十訓抄』の記事はこれに拠るのであろう。勘解由次官明宗が秦舞陽になぞらえられているのは明確であることから、天皇が始皇帝になぞらえられていることが想像される。しかも秦舞陽が顔色を変え、震えだした理由を『十訓抄』は「逆心をつつみえざりけるゆゑ」としている。これは『史記』にない発想であ

る。史実では、まだ中国は統一前の群雄割拠の状態であり、秦舞陽は秦王政の支配下にある者ではなく、自身の仕える燕国の太子の命令により暗殺に赴いたに過ぎない。そのため、始皇帝を暗殺しようとも「逆」にはならない。しかし『十訓抄』では秦舞陽が抱いたのが「逆心」と表記されており、始皇帝と秦舞陽の間に主従関係があると捉えていることとなる。ここでも始皇帝が天皇のなぞらえと違ったことにより、人臣は全て始皇帝に仕えるものと見なされたのであろう。

『将門記』にも罪に問われた平将門が恩赦を受け、帰国を許される承平七年四月七日の場面に「忝くも燕丹の邊を辞す¹³」とある。これは、「燕丹子」などに見える始皇帝暗殺故事の前日譚、秦で人質となっていた燕国の太子丹が、始皇帝の許しを得て燕に帰国した故事を踏まえる¹⁴。帰国を望む燕国の太子丹に対し始皇帝が無理難題を出す¹⁵が、丹は天助を受けてそれを解決し、始皇帝の許しを得て無事に帰国する。この表現においては、捕らえられた将門が燕丹子、恩赦を出し帰国を許す天皇が始皇帝になぞらえられているわけである。

このように、天皇を始皇帝に喩える表現がしばしば用いられていることから、中国古典では瑕疵の多い、暴虐の君主として語られる始皇帝を、日本古典では断罪されるはずがない、つまり無辜の君主と捉える傾向があると言えるだろう。

続いて、松という植物の持つ文学的イメージについても、簡潔に確認しておきたい。松は常緑樹であり、中国古典の世界では、すでに述べたように、不変性や君子を象徴する樹木である。また前述

の中尾氏の指摘の通り、「有用な人材の比喩」にもなる。

一方、日本の古典に見える松については、片桐洋一氏が「千歳」という語とともによまれること¹⁶が多く、「松」を皇室のシンボルとして一体化して寿ぐこともあった¹⁷。「神が宿り靈魂を持つ木であるという前提があった」ことを指摘している¹⁸。松の象徴するものは日中の間でいくらか異なるものの、不変性・永遠性を象徴し、優れた樹と見なされるという点においては大きな差がないように思われる。

ここで五大夫の松に話を戻したい。

中国古典の中では、暴虐の君主として描かれる始皇帝が、君子を象徴する松に五大夫の爵位を与えたとの故事は、故事としては広く知られ、松に五大夫や大夫松という異称を生み出した。しかし、その故事が例えば松に対して「暴虐の君主から封爵された無節操な植物」との意味づけを与えたり、始皇帝に対して「松のような優れた材を見いだした有能な皇帝」との意味づけを獲得させたりすることはないように見える。

『史記』中の故事は、暴風雨を焦点化しており、暴風雨のために封禅に失敗したと人々が語っていたことを、わざわざ司馬遷は記録している。中国の皇帝は天によってその在り方を評価され続ける存在であり、天からの評価はしばしば自然災害などの形で示されるものであって、それらを記録することは歴史書の重要な役割であったからである。封禅に際して起こった暴風雨が天からの譴責であったと考えるのであれば¹⁹、この故事は天が始皇帝に戒めを与え、敢えて封禅をさせなかったことを意味していることとなる。そうであ

れば『史記』の記述が暴風雨を中心に据えるのも当然である。五大夫封爵の記事が、「始皇本紀」にのみ短く記録され、封禪が批判されかつ失敗したとみなされていたことに言及する『史記』「封禪書」には記録されていなかったのは、以上のような理由によるものではないだろうか。『史記』で始皇帝を批判した儒者たちや始皇帝当時の民衆のみならず、後世の司馬遷や許愨を初めとする人々もまた同様に、暴風雨を天からの譴責と捉えていたことであろう。

後世、五大夫や大夫松が松の異称として用いられるようになる。封爵の経緯として重要である暴風雨への言及が必ずしも意識されなくなる。その結果、例えば王維詩や李涉詩には、故事を踏まえつつ、長寿の松と不老不死を得られなかった始皇帝とを対比的に描くような詩句も見いだせる。しかしそれは暴風雨が天の譴責ではないと考えられるようになったからではない。むしろ始皇帝が暴虐の皇帝であるとの理解が自明であったためである。例えば劉希夷や李商隱は、封爵の故事と始皇帝の暴虐を結びつけて詩にしている。詩人たちは、天譴としての暴風雨には一切言及しないにも関わらず、松への言及を介して始皇帝を批判する。大夫松が天譴たる暴風雨から表現上切り離されたとしても、始皇帝は中国古典の世界にあっては批判から逃れることはできないのである。

一方、日本においては、始皇帝は天皇の比喻にも用いられる存在であり、片桐氏によれば松もまた「皇室のシンボル」になりうるめでたい樹であった。両者はいずれも肯定的に捉えられる存在であり、親和性が高い。また、管見の限り、始皇帝が暴風雨に遭ったことは爵位を与える理由付けとして言及されるに過ぎず、そこに天譴

の意味を読み取ることはしていない。そのため、松に爵位を与えたことで始皇帝は「賢き人」として、始皇帝に爵位を与えられたことで松は「始皇の御爵にあづかるほどの木」として評価され、この故事が美談として理解され得るのである。

おわりに

以上に、大夫松をめぐる日中の差異を確認し、その背景に始皇帝のイメージの違いや天譴の思想があることを指摘した。中国古典においては、始皇帝は暴虐の君主であり、天譴と見なしうる暴風雨こそがこの話の眼目であって、始皇帝から松が爵位を与えられたことは故事の付加的な側面であり、五大夫または大夫松という異称を生み出したに過ぎなかった。しかし、日本古典においては、始皇帝は天皇と近似の存在としてしばしば引き合いに出され、その始皇帝の松に対する心情を興味あるものとして高く評価する。同じ故事を踏まえていながら、重視している点が異なるために、その引用の文脈には大きな違いが生じているといえるだろう。

しかし、この故事の比較にはまだ検討すべき問題が多く残っている。五大夫松の文学的表現の違いは、王権の在り方の差異に拠って生じたものであると同時に、松という樹の持つ意味や故事の言及される文脈、優れた人物はどうあるべきか、木石と人との交流をどう意味づけるかなど様々な時代的、文化的問題を孕んでいる。例えば、ゴイサギは『平家物語』巻五「朝敵揃」によれば、醍醐天皇の宣旨に従ったことから五位の爵位を与えられたとされているが、五位以上は大夫であることから大夫驚とも呼ばれるという。日本にお

いて五大夫が五位の大夫と誤って理解されてきた文脈や、五大夫の松を「大夫松」とも呼ぶことなどと合わせて考えるとこの二つの故事の間には何らかの関係性が見いだせるかもしれないと考えている。しかし、本論においてはこのゴイサギ故事を含む様々な課題について論じることができなかった。これらの点については今後の課題としていきたい。

注

- (1) 『漢書』卷十九「百官公卿表」の秦代の二十等爵の項には、「其爵名(中略) 九五大夫」とある。「九」は下から九番目の意味。
- (2) 『史記』卷二十八「封禪書」「於是徵從齊魯之儒生博士七十人、至乎泰山下。(中略) 始皇聞此議各乖異、難施用、由此絀儒生。」
- (3) 小天門有秦時五大夫松。
- (4) 例えば『論語』子罕篇に「子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也」とある。
- (5) 「六朝初唐の詠松詩について 王勃と劉希夷における「澗底の松」の源流をめぐって」『九州中國學會報』四十一、二〇〇三)
- (6) 浅見和彦校注・訳『新編日本古典文学全集五十一 十訓抄』(小学館、一九九七)
- (7) 前掲『新編日本古典文学全集』は水に銭を投げ入れる故事を『三輔決録』に拠ると指摘する。
- (8) 小山弘志・佐藤健一郎校注・訳『新編日本古典文学全集五十八 謡曲集①』(小学館、一九九七)
- (9) 注(8)に同じ。
- (10) 『国大語研究』三十七、二〇一九。
- (11) 注(6)に同じ。

(12) 『史記』卷八十六「刺客列伝」には「至陞、秦舞陽色變振恐、群臣怪之」とあり、「燕丹子」には「武陽大恐、兩足不能相過、面如死灰色。秦王怪之」とある。「燕丹子」の「武陽」は「秦舞陽」のこと。

(13) 柳瀬喜代志等校注・訳『新編日本古典文学全集四十一 将門記 陸奥話記 保元物語 平治物語』(小学館、二〇〇二)「将門幸遇此仁風、依承平七年四月七日恩詔罪無輕重、含悦醫於春花、賜還向於仲夏。忝辭燕丹之違、終歸島子之墟。」

(14) 『史記』では逃亡した事になっているが、「燕丹子」では天助により難題を解決して帰国の許しを得た事になっており、『将門記』の故事は「燕丹子」により近い。だが、「燕丹子」の太子丹が帰国を望んだ理由は、始皇帝の与えた待遇が悪かったからである。『平家物語』「咸陽宮」では太子丹が始皇帝に対して反乱を起こした罪で捕らえられた事になっており、より『将門記』の平将門の状況に近い。直接的には『将門記』は『平家物語』「咸陽宮」あるいはそれに類する故事を踏まえていたと考えた方がいいであろう。

(15) 片桐洋一編『歌枕歌言葉辞典増訂版』(笠間書院、一九九九)「松」項。

(16) 風雨が天からの強い譴責と見なされるものであったことは、例えば『漢書』卷二十七下之上「五行志下之上」に、前漢に反乱を起こそうとした王への戒めとして天が風雨を起こしたが、彼らが悟らず改めなかったため、誅殺されたとの二条の記事(文帝五年、呉暴風雨、壊城官府民室。時吳王濞謀為逆乱、天戒数見、終不改寤、後卒誅滅。／昭帝元鳳元年、燕王都薊大風雨、拔宮中樹七围以上十六枚、壊城楼。燕王且丕寤、謀反発覚、卒伏其辜)を載せることなどから窺い知れる。

(たかしば・あさこ／横浜国立大学准教授)